

思春期の子どものテレビメディアとの関わりおよび心理的变化

— 小学5年生を3年間追跡して —

角 谷 詩 織* 無 藤 隆**

本研究の目的は、小学5年生が中学2年生になるまでに、心理的側面とともに、テレビとの関わりかたをどのように変化させるかを捉えることである。首都圏40km圏内からランダムに抽出された小学5年生（第1回調査時）のうち、第1回および第3回の調査の有効回答者843名およびその主たる養育者を分析対象とした。分析の結果、小学5年生から中学2年生になるにつれ、悩み事、特に学業に関する悩み事が増加し、学業に対する自信が低下すること、また、社会的に逸脱した問題行動や事象に対して容認する傾向が高まることが示された。さらに、テレビ番組における暴力シーンを容認する傾向も高まった。一方、テレビ視聴形態は、親の指示に従った視聴行動から、友だちとの話題共有への必要性などを考慮した主体的な視聴形態がみられるようになった。

問題と目的

1. 思春期の発達特性

思春期は、生理的、認知的、社会的なあらゆる側面で著しく発達する時期である。身体的にも成長し、物事を多角的に現実的に捉えることができるようになり、自分の意志で活動することができるようになる。社会的にも大人の振る舞いを期待されはじめるのもこの時期である。このように、思春期は自立した一個人としてのスタートの時期である。ただし、多くの変化に比較的短期間で対応しなくてはならないこと、今日の社会的背景—身近なモデルとなる大人がいないこと、価値観の多様化の中での画一的な学業偏重という矛盾など—によって、この時期の子どもたちは将来展望が難しくなり、不安や混乱、葛藤を多く経験し、適応上の問題が生じることとなる(e.g., 笠井, 2000; 塩見, 1994; Wigfield, Eccles, & Pintrich, 1996; 吉野, 1994)。

上述のような時期にある思春期を「疾風怒濤の時代」と呼ぶことに対しては議論が分かれるところである(Eccles, Midgley, Wigfield, Buchaman, Reuman, Flanagan, & Iver, 1993; Roeser, Eccles, & Sameroff, 2000; 塩見, 1994)が、適応することが難しい時期であるという見解は一致している(Fuligni, Eccles, Bar-

ber, & Clements, 2001; Roeser & Eccles, 1998; Roser et al., 2000; Ryan, 2001; 塩見, 1994; 吉野, 1994)。

この時期の子どもは、様々な面でネガティブな変化を呈す。自尊感情が低下したり(Alsaker & Olweus, 1992; Marsh, 1989; 佐藤・杉原・藤生, 2000)、身体能力に関わる自己概念(Marsh, 1989; Wigfield, Eccles, Iver, Reuman, & Midgley, 1991)や教科ごと、学業全般に関する学業コンピテンス(Marsh, 1989; Wigfield et al., 1991)、仲間関係での自分の地位の認識(Berndt & Burgy, 1996)などをはじめとする自身の内側に向かう認識、つまり、自己概念がネガティブに変化する(Crain, 1996; Rosenberg, 1986)ことをはじめ、環境への認識、例えば、学校への満足感や価値観が低下したり(Berkovitz, 1997; Eccles, et al., 1993; Hirsch & Rapkin, 1987; Marsh, 1989; Ryan, 2001)、抑うつ傾向が高まったり(Berkovitz, 1997)、不登校、退学、煙草、アルコール、ドラッグ、10代の妊娠、非行などの事件や問題行動が増加することが示されている(Bailey, 2000; Pnton, 1997; Weissberg & Greenberg, 1998)。

わが国では、青少年犯罪の中でも、特に、凶悪犯少年の検挙人員は、1989年(平成元年)を境に再び増加に転じている(警察庁, 2002; 総務省, 2002; 恩賜財団母子愛育会・日本子ども家庭総合研究所, 2002)。ただし、1964年頃と比較すると、その数は少なく、ま

キーワード：テレビ、思春期の発達、追跡研究

* お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 ** お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

た、検挙される犯罪の質も変化しており、犯罪検挙率から、単純に、青少年の犯罪の深刻化・一般化を議論することは適切ではない面もある。それでも、総務省(2002)による1980年から1999年の一般刑法犯罪少年の推移をみると、殺人は45人から110人、強盗は761人から1611人となっている。また、警察庁(2001)によると、凶悪犯少年の検挙人数は1989年の1225人から2000年の2120人に増加した。さらに、2000年における強盗犯の少年検挙の人口比は成人検挙の人口比の約9倍、傷害は約7倍、恐喝は約17倍という状況にある。17歳の青年の犯罪に対する驚きの心情は薄らぎ、「またか」という溜息の聞こえるような状況は、青少年の問題が、益々、深刻化、一般化していることを示していると言えよう。

この問題に対して求められることは、適応上の問題を抱えている青少年へ適切な介入を実践すること、青少年の適応上の問題を予防することだろう。そして、この適切な介入や予防の実践の第一歩として、適応上の問題のリスクとなる要因が何であるのかを明らかにし、リスク要因と青少年の適応上の問題との関連のメカニズムを解明することが求められている(Connor, 2002)。思春期に表面化する問題行動の背後には、それ以前、特に児童期における要因も存在する。Underwood(2002)は、10歳以降の攻撃的行動が、特に男子で安定すると論じている。サリヴァン(Sullivan, 1953)は、前思春期は、それまでの発達段階のゆがみが非常にマまた、イナスとなって現れる時期であり、思春期はさらに高度のマイナスとなる時期としている。

2. テレビメディア要因への注目

思春期のこのような変化や、その適応の難しさが論じられる一方で、子どもの様々な問題とテレビメディアとの関連も注目され続けている。例えば、テレビ番組内での暴力シーンが子どもの攻撃行動や暴力に影響を与えうること(Cantor, 2000; Huston, Donnerstein, Fairchild, Feshbach, Katz, Murray, Rubinstein, Wilcox, & Zuckerman, 1992)、視聴時間の長い子どもは、攻撃性の高い子ども(Singer, Slovak, Frierson, & York, 1998)や摂食障害にかかる子ども(Fouts & Vaughan, 2002)の割合が高いこと、子ども部屋にテレビがある子どもは、テレビ視聴時間が長く学業成績が低いこと(Gentile & Walsh, 2002)などが示されている。日本でも、青少年に対するテレビメディアの影響についての議論が高まっており、放送局での番組の自主規制が実施されるなど、メディア界においても、特

にそのネガティブな影響に対する懸念をうけた対策がとられはじめている。それとともに、首都圏を中心とした4年間の追跡調査が開始され(無藤・川浦・角谷, 2001; 無藤・角谷, 2001; 角谷・無藤, 2002)、その影響のメカニズムの解明が試みられている。

3. 本研究の目的

ただし、児童期後期から思春期にかけて、子どもたちのテレビ視聴の仕方、テレビに対する意識がどのように変化するのかという点はまだ調べられていない。心理的、社会的に大きな変化をみせるこの時期には、テレビへのかかわりかた、また、子どものテレビ視聴に対する親の関り方も変化するということが予想される。親からの自立を試み始めるこの時期には、親の取り決めに従ったテレビ視聴から、自分の嗜好に合わせ、自分で決めた視聴の仕方に変化するだろう。また、テレビ番組の嗜好にも変化がみられる時期でもある。本研究では、小学5年生を中学2年生まで追跡し、彼らの心理的变化とともに、テレビとの関り方がどのように変化するのかを捉えることを目的とする。

方法

2001年2月から2003年2月の毎年1回(計3回)、質問紙調査を実施した。

対象：第1回調査(T1)；首都圏40km圏内の小学5年生とその主たる養育者1500組(二段階無作為抽出法)。第2、3回調査(T2, T3)；第1回調査の有効回答者となった小学6年生とその主たる養育者1,006組。

調査時期：第1回調査；2001年2月。第2回調査；2002年2月。第3回調査；2003年2月。

調査方法：調査員が対象者自宅へ訪問し、質問紙を個人面接法で実施した。

回収率(子ども用質問紙に1問でも回答したものを有効回答票とした)：第1回調査；61.7%(1006組：小学5年生内訳 女子490名、男子516名)。第2回調査；84.5%(882組：小学5年生内訳 女子430名、男子452名)。第3回調査；83.8%(843組：中学1年生内訳 女子411名、男子432名)。

分析対象：第3回調査の有効回答者843組を本研究の分析対象者とした(表1)。

調査内容：子どもの適応に関連するとみなされている要因を広く捉えるため、子どもの生活習慣、心理的要因(悩み、抑うつ傾向、社会的ルール違反傾向、セルフコンピテンスなど)、環境要因(学校・家庭・友だち

表1

分析対象者内訳

		総数	保護者の属性別			
			母親	父親	その他	保護者無回答
小学6年生の属性	男子	432	386	22	7	17
	女子	411	367	22	5	17
合計		843	753	44	12	34

関係など)、養育者の生活習慣、心理的要因(抑うつ傾向、悩み、養育者としての自信など)について、1～数項目単位で尋ねた。無作為標本による分析を行うことで、分析結果が、より母集団に適用可能であるという意義がある。各要因における項目数の少なさは、調査対象者がランダムサンプリングであることにより対応可能であるとみなした。

結果

表2に、本研究で取り上げた質問内容とその予想される結果および結果を記した。以下に、結果を順に記す。

1. 子どもの生活リズム

平日1日あたりのテレビ視聴時間(表3)は、2～3時間が54%(男子; T1 59%→T2 58%→T3 59%、女子; T1 49%→T2 46%→T3 49% 以下同様)で小5、小6時と大きな変化はみられないが、子ども部屋での視聴時間の増加が女子においてみられた。

就寝時間について、男女とも1週間のうちに11時過ぎまでおきていることが「ほとんど毎日」が最も多くなった(男子; 13%→17%→28%、女子; 16%→22%→40%)(表4)。

2. テレビ、その他の子ども専用機器の所有状況

子ども部屋のテレビ所有率(表5)は40%(男子; 37%→36%→42%、女子; 32%→31%→38%)で、小5、6と変わらない。また、子ども部屋にテレビがある子ども(男子; 182名、女子; 158名)の子ども部屋でのテレビ視聴時間は、男子では「1時間ぐらい」が最も多い(28%→22%→26%)、女子では「ほとんど見ない」が最も多い(30%→31%→32%)が、女子で「2時間ぐらい」が増加した(男子; 16%→12%→18%、女子; 12%→17%→23%)(表6)。

メディア機器などの個人所有を尋ねたところ、最も多くの子どもが持っている物は、男子、女子ともに「テ

レビゲーム機」(男子; 77%→76%→77%、女子; 54%→53%→49%)と「携帯ゲーム機(ゲームボーイなど)」(男子; 73%→68%→66%、女子; 58%→52%→47%)で小5、6と変わらないが、男女とも、「テレビ」(男子; 24%→27%→31%、女子; 22%→23%→28%)、「ラジオ・ラジカセ」(男子; 11%→15%→23%、女子; 25%→34%→39%)、「携帯電話・PHS」(男子; 2%→6%→21%、女子; 11%→21%→41%)が増加した。

なお、家庭全体での機器の所有率が増加したものには「携帯電話・PHS」(80%→85%→93%)、「パソコン」(65%→70%→81%)、「ファクス」(58%→60%→69%)である。

3. テレビ視聴形態・保護者の働きかけ

普段どんなテレビの見方をしているかを尋ねたところ、「見る時間が決まっている」(全体; 38%→31%→36%)、「一人で見ることが多い」(全体; 26%→26%→29%)など、子ども自身の見方は小5、6と変わらないが、保護者の働きかけは減少し、「見ている内容やあらすじを分かりやすく説明する」(51%→50%→47%)(表7)、「子どもに見せたくない内容はチャンネルを変えたりして見せない」(60%→54%→48%)、「子どもの見る番組や時間帯を決めている」(60%→50%→43%)(表8)が半数をきった。

4. 子どものよく見る番組

男子では、「アニメ・マンガ」が67%、女子では、「ドラマ」が74%と最も多い。小5、6と比較すると、男女とも「アニメ・マンガ」の割合が減少し(男子; 90%→82%→67%、女子; 76%→72%→60%)、「ドラマ」(男子; 32%→41%→43%、女子; 56%→63%→74%)、「トーク番組」(男子; 9%→14%→18%、女子; 29%→43%→48%)、「歌番組・音楽番組」(男子; 10%→19%→33%、女子; 46%→60%→66%)などが増加した。

5. テレビ観・テレビの必要性

テレビについて、「見るだけでいろいろなことがわかる」、「手軽に楽しい気分になれる」、「友だちと共通の話題ができる」と捉える子どもは、80%以上いる。特に女子で「友だちと共通の話題ができる」が多い(男子; 84%→86%→87%、女子; 90%→91%→96%)。

テレビがどの程度必要なものか尋ねたところ、テレビがどの程度必要なものか尋ねたところ、「かなり必要なもの」が41%で最も多い(男子; 37%→35%→42%、

表 2

各項目ごとの予想される結果と結果一覧 (小学5年生から中学2年生まで)

	項目	予想結果	結果
子どもの生活リズム	平日1日あたりテレビ視聴時間	増加	変化なし
	子ども部屋での視聴時間	増加	増加(女子)
	就寝時間	遅くなる	遅くなる
テレビ、その他の子ども専用機器の所有状況	テレビ	増加	増加
	テレビゲーム	増加	変化なし
	携帯ゲーム	増加	現象
	ラジオ・ラジカセ	増加	増加
	携帯電話・PHS	増加	増加
テレビ視聴形態・保護者の働きかけ	時間を決めた視聴	増加	変化なし
	一人での視聴	増加	変化なし
	内容などの説明(保護者)	減少	減少
	見せたくない番組を見せない(保護者)	減少	減少
	番組や時間帯を決める(保護者)	減少	減少
子どものよく見る番組	アニメ・マンガ	減少	減少
	ドラマ	増加	増加
	トーク番組	増加	増加
	歌番組・音楽番組	増加	増加
テレビ観・テレビの必要性	見るだけでいろいろなことがわかる	—	変化なし
	手軽に楽しい気分になれる	—	変化なし
	友だちと共通の話題ができる	—	変化なし
	テレビの必要性	—	増加
テレビの直接的影響の自覚	コマーシャルで見たものを思わず買ってしまう	—	変化なし
	テレビに出てきた流行のことばをすぐに使う	—	変化なし
	テレビに登場する人物のようになりたい	—	変化なし(男子<女子)
暴力シーンに対する意識・暴力観	暴力シーンを見たときの気持ち	「特に何も感じない」が増加	「特に何も感じない」が増加
	笑いのための暴力	許容するようになる	「嫌な気分になる」が減少(男子) 「どちらかというと『笑いをとるためにはやっても構わない』に近い」が増加 「『いくら笑いをとるためとはいえ、そういうことはよくない』に近い」が減少
	正義のための暴力	許容するようになる	「どちらかというと『正義のためであれば、力で相手を倒すことは良い』に近い」が増加 「『いくら正義のためだからとはいっても、暴力はよくない』に近い」が減少
テレビゲーム・インターネット・電子メールの使用	テレビゲームの使用	減少	「ほとんどやらない」が増加(女子)
	テレビゲームの種類や時間の取り決め(保護者)	減少	減少
	電子メール使用頻度	—	男子<女子
	インターネット使用目的	—	自分の趣味や好きなことに関する情報収集 宿題や勉強、学校に関する調べごと(女子)
家庭環境認知	家族と一緒にいること	「楽しい」が減少	「楽しい」が減少、「まあ楽しい」が増加
学校環境認知	学校の楽しさ	「とても楽しい」が減少	変化なし
	教師は自分の良いところをわかってくれている	「そう思う」が減少	「そう思う」が減少し、「まあそう思う」が増加
友だちの規定	仲良しの友だち	「親友」が増加	「一緒に遊ぶ」が最多 「一緒に勉強する」が増加 「相談事、秘密を教えあう」が増加
自己概念	学業自己概念	低下	勉強が「得意なほう」は減少
心理的問題	抑鬱傾向	増加	「何もやる気がしないこと」が女子で増加する以外は変化なし
	社会的ルール違反傾向	容認傾向の増加	容認傾向の増加

表3

月曜日から金曜日の学校のある日に、1日あたり、テレビ番組をどのくらい見えていますか。ビデオに録画して見ている時間を入れて、この中から1つだけ選んでください。

	人数	30分 ぐらい	1時間 ぐらい	2時間 ぐらい	3時間 ぐらい	4時間 ぐらい	5時間か それ以上	ほとんど 見ない	わからない ・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	2.3	14.6	25.5	28.5	15.8	11.7	1.3	.4	
	男子	432	1.9	14.4	29.2	30.1	14.1	9.0	.9	.5	
	女子	411	2.7	14.8	21.7	26.8	17.5	14.6	1.7	.2	
第2回	総数	843	1.4	10.9	26.3	25.7	15.9	14.2	.8	1.4	3.2
	男子	432	1.4	9.3	34.7	23.4	14.6	11.1	1.2	1.2	3.2
	女子	411	1.5	12.7	17.5	28.2	17.3	17.5	.5	1.7	3.2
第1回	総数	843	2.3	15.3	28.4	26.1	14.0	12.7	1.2	.1	
	男子	432	2.1	15.0	31.7	27.5	12.0	10.0	1.6	.0	
	女子	411	2.4	15.6	24.8	24.6	16.1	15.6	.7	.2	

表4

夜11時過ぎまで起きていることが1週間に何日くらいありますか。

	人数	ほとんど 毎日	4～5日 ぐらい	2～3日 ぐらい	4.1日 ぐらい	11時過ぎまで おきているこ とはない	わからない ・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	33.5	16.6	28.8	11.5	9.6	.0	
	男子	432	27.5	15.3	34.0	13.0	10.2	.0	
	女子	411	39.7	18.0	23.4	10.0	9.0	.0	
第2回	総数	843	19.2	12.7	23.6	18.4	21.1	1.8	3.2
	男子	432	16.7	13.2	22.2	20.8	22.2	1.6	3.2
	女子	411	21.9	12.2	25.1	15.8	20.0	1.9	3.2
第1回	総数	843	14.8	9.7	25.6	20.0	29.7	.1	
	男子	432	13.4	9.5	25.9	20.1	30.8	.2	
	女子	411	16.3	10.0	25.3	20.0	28.5	.0	

表5

自分の部屋やきょうだいの部屋など、子どもの部屋にテレビはありますか。

	人数	ある	ない	子どもの部屋 はない	その他	わからない ・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	40.3	52.6	7.0	.0	.1	
	男子	432	42.1	51.2	6.7	.0	.0	
	女子	411	38.4	54.0	7.3	.0	.2	
第2回	総数	843	34.0	54.0	7.5	.0	1.3	3.2
	男子	432	36.3	52.1	7.4	.0	.9	3.2
	女子	411	31.6	56.0	7.5	.0	1.7	3.2
第1回	総数	843	34.6	56.6	8.8	.0	.0	
	男子	432	37.3	54.2	8.6	.0	.0	
	女子	411	31.9	59.1	9.0	.0	.0	

表6

子どもの部屋で1日あたりどのくらいテレビを見えていますか。(子どもの部屋にテレビがある者)

	人数	30分 ぐらい	1時間 ぐらい	2時間 ぐらい	3時間 ぐらい	4時間 ぐらい	5時間か それ以上	ほとんど みない	わからない ・無回答	
第3回	総数	340	14.4	24.1	20.0	9.1	2.4	2.6	27.1	.3
	男子	182	18.1	26.4	17.6	12.6	1.1	1.1	22.5	.5
	女子	158	10.1	21.5	22.8	5.1	3.8	4.4	32.3	.0
第2回	総数	287	15.3	22.0	14.3	11.5	3.8	2.4	30.0	.7
	男子	157	17.8	21.7	12.1	11.5	5.1	1.3	29.3	1.3
	女子	130	12.3	22.3	16.9	11.5	2.3	3.8	30.8	.0
第1回	総数	292	19.9	26.4	13.7	5.1	2.4	3.1	29.5	.0
	男子	161	19.9	28.0	15.5	3.1	1.9	2.5	29.2	.0
	女子	131	19.8	24.4	11.5	7.6	3.1	3.8	29.8	.0

表7

あなたは、〇〇さん(〇〇くん)がテレビを見ているときに、ここにあげたようなことをしますか。(保護者への質問)
見ている内容やあらすじを分かりやすく説明する

	人数	よくする	ときどきする	あまりしない	ぜんぜんしない	わからない・無回答	第2回無効
第3回	総数	809	6.9	40.7	35.6	16.8	
	男子	415	6.0	40.7	35.4	17.8	
	女子	394	7.9	40.6	35.8	15.7	
第2回	総数	843	7.1	43.3	31.7	12.0	3.2
	男子	432	6.0	45.8	29.6	13.2	3.2
	女子	411	8.3	40.6	33.8	10.7	3.2
第1回	総数	843	9.3	41.5	34.5	11.2	
	男子	432	9.5	40.7	35.2	10.6	
	女子	411	9.0	42.3	33.8	11.7	

表8

あなたは、〇〇さん(〇〇くん)がテレビを見ているときに、ここにあげたようなことをしますか。(保護者への質問)
子どもの見る番組や時間帯を決めている

	人数	よくする	ときどきする	あまりしない	ぜんぜんしない	わからない・無回答	第2回無効
第3回	総数	809	18.7	24.7	40.8	15.6	
	男子	415	18.6	25.1	39.8	16.1	
	女子	394	18.8	24.4	41.9	15.0	
第2回	総数	843	25.4	24.4	34.4	9.7	3.2
	男子	432	24.5	25.0	36.6	8.6	3.2
	女子	411	26.3	23.8	32.1	10.9	3.2
第1回	総数	843	34.4	25.3	28.8	7.5	
	男子	432	35.2	24.5	28.9	6.7	
	女子	411	33.6	26.0	28.7	8.3	

女子;36%→37%→41%)。次いで「あったほうがよい程度のもの」(男子;41%→40%→35%、女子;45%→40%→37%)、「絶対必要なもの」(男子;19%→19%→21%、女子;17%→17%→21%)である。

6. テレビの直接的影響の自覚

影響の自覚に小5、6と大きな変化はみられなかったが、「コマーシャルで見たものを思わず買ってしまったこと」がある子どもが40%と最も多く(男子;45%→39%→39%、女子;44%→41%→41%)、次いで「テレビに出てきたはやりのことばをすぐに使ってみたこと」(男子;31%→29%→28%、女子;38%→37%→38%)である。「テレビに登場する人のようになりたいと思ったこと」は、女子で多かった(男子;24%→20%→16%、女子32%→33%→30%)。

7. 暴力シーンに対する意識・暴力観

暴力シーンをテレビで見たときの気持ち(表9)は、男女とも「いやな気分になる」が最も多い(男子;44%→40%→34%、女子;54%→53%→49%)。小5、6と

比較すると「とくに何も感じない」が増加し(男子;22%→24%→34%、女子;15%→16%→19%)、男子では「いやな気分になる」が減少した(44%→40%→33%)。

また、男女とも、バラエティ番組で笑いをとるために人を叩いたり、アニメやドラマで正義のために悪者を力で倒す場面を容認する傾向が高まった。つまり、笑いをとるために他の人に物を投げたりたたいたりからかったりする場面に対して(表10)、「どちらかという『笑いをとるためにはやってもかまわない』に近い」(男子;17%→20%→35%、女子;16%→20%→29%)、また、「どちらかという『正義のためであれば、力で相手を倒すことは良い』に近い」(男子;26%→26%→38%、女子;24%→31%→39%)が増加し「『いくら笑いをとるためとはいえ、そういうことはよくない』に近い」(男子;41%→34%→20%、女子;42%→33%→25%)、「『いくら正義のためだからとはいっても、暴力はよくない』に近い」(男子;26%→18%→10%、女子;25%→19%→12%)が減少した。

表9

テレビでは、暴力をふるったり殺したりする場面がでてきますが、そのような場面を見たとき、どんな気分になりますか。あてはまるものをこの中からいくつでも選んでください。

	人数	スカットとする	いやな気分になる	ものたりないと思う	こわくて目をつぶる	夢中になる ハラハラドキドキして	実際のことはないので シラける	カッコいいと思う	自分もそこに入りたいと思う	とくになにも感じない	その他	そのような場面を見た ことがない	わからない・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	2.0	40.9	1.1	18.1	19.1	10.4	3.6	1.1	26.5	.0	1.9	1.2	
	男子	432	3.0	33.6	1.2	9.3	20.1	10.9	4.2	1.2	33.6	.0	1.9	.5	
	女子	411	1.0	48.7	1.0	27.5	18.0	10.0	2.9	1.0	19.0	.0	1.9	1.9	
第2回	総数	843	3.2	45.9	.8	20.5	19.9	13.0	2.5	.9	19.8	.1	1.3	2.3	3.2
	男子	432	3.5	39.6	1.2	9.5	20.4	15.7	3.2	.7	23.6	.2	2.1	2.3	3.2
	女子	411	2.9	52.6	.5	32.1	19.5	10.2	1.7	1.2	15.8	.0	.5	2.2	3.2
第1回	総数	843	3.6	49.0	1.2	26.6	21.0	7.6	2.8	1.3	18.6	.2	1.8	.9	
	男子	432	4.9	44.0	.9	17.6	22.2	8.3	3.9	1.9	21.8	.5	1.9	1.2	
	女子	411	2.2	54.3	1.5	36.0	19.7	6.8	1.7	.7	15.3	.0	1.7	.7	

表10

バラエティ番組などでは、笑いをとるために、他の人のものをなげたりたいたり、からかったりする場面があります。これについて、A、B 2つの意見があります。あなたの気持ちはどちらに近いですか。

A：笑いをとるためにはやってもかまわない

B：いくら笑いをとるためとはいえ、そういうことはよくない

	人数	Aに近い	どちらかという とAに近い	どちらか という とBに近い	Bに近い	どちらとも いえない	そのような 場面を見た ことがない	わからない ・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	16.4	32.1	26.5	22.4	2.1	.1	.4	
	男子	432	19.9	34.7	22.0	20.1	2.5	.0	.7	
	女子	411	12.7	29.4	31.1	24.8	1.7	.2	.0	
第2回	総数	843	12.9	19.9	27.0	33.3	1.1	.1	2.4	3.2
	男子	432	14.6	19.7	25.9	33.8	.9	.2	1.6	3.2
	女子	411	11.2	20.2	28.2	32.8	1.2	.0	3.2	3.2
第1回	総数	843	13.0	16.4	25.0	41.5	1.7	.1	2.3	
	男子	432	14.6	16.7	23.1	40.7	1.9	.0	3.0	
	女子	411	11.4	16.1	27.0	42.3	1.5	.2	1.5	

8. テレビゲーム・インターネット・電子メール

1日あたりにゲームをする時間を尋ねたところ（表11）、小5、6と比較すると、男子ではほとんど変化がないが、女子においてテレビゲーム離れがみられ、「ほとんどやらない」が増加した（37%→39%→65%）。テレビゲームで遊んだことのある子ども（男子427名、女子367名）について、テレビゲームをやった後の気分は、「もっとやりたいと思う」が最も多い（男子；47%→44%→40%、女子；39%→39%→34%）。ただし、性差がみられ、「もっとやりたいと思う」、「スカットとする」（男子；27%→20%→26%、女子；16%→14%→17%）は男子のほうが多く、「つかれた感じがする」は女子の

ほうが多かった（男子；22%→23%→19%、女子；25%→29%→30%）。

平日1日当たりテレビゲームで30分以上遊んでいる子ども（男子319名女子125名）の保護者において、テレビゲームの時間やソフトの種類を「決めている」割合は減少し（男子；57%→47%→40%、女子；38%→35%→28%）、「決めていない」が増加した（男子；36%→50%→56%、女子；46%→52%→58%）。

第3回調査で初めて尋ねた「パソコンや携帯電話を用いての電子メールのやりとりの頻度」には性差がみられ、女子では「ほとんど毎日」が最も多く（男子；17%<女子；43%）、男子では「電子メールは使えない」

表11

月曜日から金曜日の学校のある日に、テレビゲームやゲームボーイなどを1日あたりどのくらいやっていますか。
(テレビゲームをやったことのある者)

	人数	30分ぐらい	1時間ぐらい	2時間ぐらい	3時間ぐらい	4時間ぐらい	5時間か それ以上	ほとんど やらない	わからない ・無回答	
第3回	総数	794	16.4	24.4	10.6	4.2	1.4	1.0	41.6	.5
	男子	427	15.5	34.4	18.0	6.3	1.6	1.6	21.8	.7
	女子	367	17.4	12.8	1.9	1.6	1.1	.3	64.6	.3
第2回	総数	767	16.7	31.3	17.9	5.9	1.7	2.0	24.3	.4
	男子	408	12.7	35.0	27.7	8.6	2.0	2.5	11.0	.5
	女子	359	21.2	27.0	6.7	2.8	1.4	1.4	39.3	.3
第1回	総数	805	19.4	33.3	15.8	5.0	2.0	1.7	22.9	.0
	男子	427	15.5	37.5	24.6	6.8	3.0	2.6	10.1	.0
	女子	378	23.8	28.6	5.8	2.9	.8	.8	37.3	.0

表12

家族と一緒にいるのが楽しいですか。

	人数	とても楽しい	まあ楽しい	あまり 楽しくない	ぜんぜん 楽しくない	わからない ・無回答	第2回無効
第3回	総数	843	49.6	43.2	6.3	.7	/
	男子	432	48.1	44.7	6.5	.0	
	女子	411	51.1	41.6	6.1	.5	
第2回	総数	843	56.7	33.7	4.6	.5	3.2
	男子	432	55.8	35.6	3.7	.7	3.2
	女子	411	57.7	31.6	5.6	.2	3.2
第1回	総数	843	64.1	32.5	2.4	.8	/
	男子	432	61.8	34.0	3.0	.9	
	女子	411	66.4	30.9	1.7	.7	

が最も多かった(男子;40%>女子;19%)。電子メール以外のインターネットの使用状況は、男女とも「自分の趣味や好きなことに関する情報を得る」が最も多く(男子;42%、女子;48%)、次いで、男子では「ほとんど使わない」(男子;38%、女子;33%)、女子では「宿題や勉強、学校に関する調べごとをする」(男子;33%<女子;44%)だった。

9. 家庭環境認知

小5、6と比較すると、「家族と一緒にいると楽しい」については、「とても楽しい」が50%あり最も多いが、その割合は減少し(男子;62%→56%→48%、女子;66%→58%→51%)、「まあ楽しい」が増加した(男子;34%→36%→45%、女子;31%→32%→42%) (表12)。

10. 学校環境認知

90%以上が学校を「とても楽しい」(男子;51%→46%→56%、女子;57%→60%→64%)あるいは「まあ楽しい」(男子;41%→43%→39%、女子;35%→29%→29%)と感じている。部活動には、男女とも90%以上が「入っている」(男子;91%、女子;92%)。ま

た、80%以上が「とても頑張っている」(男子;57%、女子;52%)あるいは「まあ頑張っている」(男子;29%、女子;34%)。小5、6と比較すると、小6から中1で大きな変化がみられ「担任の先生は自分のよいところをわかってくれる」に対して(表13)、「そう思う」が減少し(男子;43%→40%→30%、女子;40%→36%→27%)、「まあそう思う」が増加した(男子;39%→38%→49%、女子;41%→41%→51%)。

11. 友だちの規定

仲良しの友だちをどのように捉えているか尋ねたところ、男女とも「いっしょに遊ぶ友だち」が最も多い(男子;89%→86%→90%、女子;82%→78%→86%)。小5、6と比較すると男女とも、「いっしょに勉強する友だち」(男子;13%→18%→26%、女子;20%→27%→40%)、「相談ごとをしたり、ほかの人には言えない秘密を教えあう友だち」(男子;29%→34%→38%、女子;59%→64%→67%)が増加した。

12. 子ども自身の自己概念・自分イメージ

子ども自身に自分のイメージを尋ねたところ、小5、

表13

担任の先生は〇〇さん(くん)の良いところをわかってきていると思いますか。

	人数	そう思う	まあそう思う	あまりそう は思わない	ぜんぜんそう は思わない	わからない ・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	28.5	49.9	15.4	5.1	1.1	
	男子	432	30.3	49.3	14.6	4.2	1.6	
	女子	411	26.5	50.6	16.3	6.1	.5	
第2回	総数	843	38.0	39.6	11.2	5.1	3.0	3.2
	男子	432	40.0	38.2	10.6	4.4	3.5	3.2
	女子	411	35.8	41.1	11.7	5.8	2.4	3.2
第1回	総数	843	41.6	39.9	12.8	3.4	2.3	
	男子	432	43.1	38.7	12.3	3.5	2.5	
	女子	411	40.1	41.1	13.4	3.4	1.9	

表14

学校の勉強が得意ですか。

	人数	得意なほう	どちらかといえ ば得意なほう	どちらかといえ ば苦手なほう	苦手なほう	わからない ・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	7.6	40.8	38.7	12.1	.8	
	男子	432	10.4	42.4	35.6	10.4	1.2	
	女子	411	4.6	39.2	41.8	13.9	.5	
第2回	総数	843	17.0	43.7	27.5	7.1	1.5	3.2
	男子	432	19.4	44.9	24.8	6.3	1.4	3.2
	女子	411	14.4	42.3	30.4	8.0	1.7	3.2
第1回	総数	843	14.9	46.4	31.3	6.0	1.3	
	男子	432	16.7	48.1	27.3	6.7	1.2	
	女子	411	13.1	44.5	35.5	5.4	1.5	

6と比較すると男子で小5、6よりも「ひとりであるのが好きなほうだ」が増加した(男子;11%→13%→20%;女子15%→24%→22%)。また、男女とも、学校の勉強に対して「得意なほう」が減少した(男子;17%→19%→10%;女子13%→14%→5%) (表14)。

「今、夢中になっていること、がんばっていること」は、男女とも「スポーツ」が最も多い(男子;63%→64%→76%、女子;38%→39%→48%)。小5、6と比較すると、男女とも「テレビゲーム」(男子;42%→36%→32%;女子15%→12%→7%)、「何かを集めること」(男子;21%→13%→9%;女子21%→18%→15%)、「動物や植物の世話」(男子;9%→10%→6%;女子16%→15%→8%)は減少した。

13. 心理的問題

子どもの不安な気持ちの現れとして、「イライラすること」、「寂しくなること」、「何もやる気がしないこと」、「頭やお腹が痛くなること」がどのくらいの頻度であるかを尋ねたところ、「イライラすること」があるのは男子で57% (69%→53%→57%)、女子で71% (70%→63%→71%)、「何もやる気がしないこと」があるの

は男子で43% (43%→41%→43%)、女子で59% (48%→48%→59%)、「頭やお腹が痛くなること」があるのは男子で31% (46%→32%→31%)、女子で38% (43%→39%→38%)、「寂しくなること」があるのは男子で9% (23%→13%→9%)、女子で27% (31%→25%→27%)であり、女子のほうが不安な気持ちをよく経験する。

現在悩んでいることを尋ねたところ(表15)、男女とも「成績のこと」が最も多い(男子;21%→20%→44%、女子;24%→24%→55%)。小5、6と比較すると、男女とも「悩み事はない」が減少し(男子;43%→45%→37%、女子;39%→38%→26%)、「成績のこと」、「受験のこと」(男子;11%→5%→14%、女子;9%→3%→17%)が増加した。

「子どもだけでゲームセンターなどに行く」などの社会的ルール違反傾向に関して(表16)、男子ではいずれの行動に対しても経験がなく、また、やっても良いとは考えない子どもや、興味をもったこともない(「この中にはない」)子どもが最も多い(男子;68%→61%→50%、女子;74%→56%→35%)が、女子では「子どもだけでゲームセンターなどに行く」経験がある、あ

表15

今、悩んでいることがありますか。あれば、この中からいくつでも選んでください。

	人数	友だちのこと	成績のこと	受験のこと	家族のこと	健康や体のこと	将来のこと	性格のこと	その他	悩み事はない	わからない・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	12.5	49.5	15.7	5.9	8.9	25.6	14.6	.0	31.8	.7	
	男子	432	5.6	44.2	14.1	5.6	8.6	25.7	8.3	.0	37.0	.9	
	女子	411	19.7	55.0	17.3	6.3	9.2	25.5	21.2	.0	26.3	.5	
第2回	総数	843	14.4	21.7	4.0	4.6	12.7	24.4	16.5	.5	41.6	1.9	3.2
	男子	432	8.6	19.7	5.3	4.6	13.7	24.8	11.8	.7	44.7	1.9	3.2
	女子	411	20.4	23.8	2.7	4.6	11.7	24.1	21.4	.2	38.4	1.9	3.2
第1回	総数	843	14.5	22.4	10.2	3.6	12.3	19.2	17.1	.2	40.9	.9	
	男子	432	8.6	20.8	11.1	3.2	12.5	23.6	14.1	.5	42.6	1.2	
	女子	411	20.7	24.1	9.2	3.9	12.2	14.6	20.2	.0	39.2	.7	

表16

次のことのなかで、やったことのあること、あるいはやってみたいと思うことや、ときにはやってもいい場合もあると思うことはありますか。あれば、この中からいくつでも選んでください。

	人数	子どもだけでゲームセンターなどに行く	前夜でおそくコンビニの前で友だちとしゃべる	知らない人の自転車をかっらに使う	タバコをすう	親にないしよでお酒を飲む	万引きをする	物をわざとこわす	だれか人をなぐる	家出をする	この中にはない	わからない・無回答	第2回無効	
第3回	総数	843	52.9	10.3	.7	1.7	1.4	.8	1.4	2.1	3.6	42.5	.7	
	男子	432	44.4	10.2	.7	1.9	1.9	.7	1.4	2.5	2.3	50.0	.9	
	女子	411	61.8	10.5	.7	1.5	1.0	1.0	1.5	1.7	4.9	34.5	.5	
第2回	総数	843	30.8	4.2	.5	.4	.6	.2	.8	1.7	5.2	58.7	1.9	3.2
	男子	432	27.8	4.4	.5	.5	.7	.5	.7	2.3	4.2	61.1	1.9	3.2
	女子	411	34.1	3.9	.5	.2	.5	.0	1.0	1.0	6.3	56.2	1.9	3.2
第1回	総数	843	23.5	3.7	.8	.7	.9	.5	.2	1.4	2.3	71.1	1.2	
	男子	432	25.0	3.2	1.4	1.2	1.2	.9	.5	1.9	2.1	68.3	1.4	
	女子	411	21.9	4.1	.2	.2	.7	.0	.0	1.0	2.4	74.0	1.0	

るいはやってもよい、やってみたいと思う者（男子；25%→29%→44%、女子；22%→34%→62%）が最も多くなった。小5、6と比較すると、「この中にはない」の割合が減少し、「子どもだけでゲームセンターなどに行く」、「夜おそくコンビニの前で友だちとしゃべる」（男子；3%→4%→10%、女子；4%→4%→11%）ことを経験したことがある者、やっても良い場合もあると思っている、あるいは興味を持っている者が増加した。

考察

以上の結果から、小学5年生から中学2年生にかけ

て、就寝時間が遅くなったり、テレビ以外にもラジオや携帯電話をもつ子どもが増加するなどの生活面や、抑鬱感情や悩みごとなどの心理面での変化がみられた。心理的な側面では、悩み事、中でも特に成績や受験の悩みごとが増えたり、勉強に対する自信が失われるなど、学業にかかわる心理的負担が強くなった。これは、この時期の子どもの自尊感情が低下したり（Alsaker & Olweus, 1992；Marsh, 1989；佐藤・杉原・藤生, 2000）、学業全般に関する学業コンピテンス（Marsh, 1989；Wigfield et al., 1991）が低下するという先行研究結果と一致する。

学校や家庭に対しても、小学5年生では無条件に楽しいと感じる者が多かったのに対し、中学2年生では、

そのようなことはなく、まあ楽しいといった程度にとどまるなど、自分を取巻く世界に対する認識の変化が見られた。また、先生に対しても、担任の先生は自分のことを十分よくわかってくれるという認識から、まあわかってくれるだろう程度への変化がみられた。本調査では、極端に学校への意識がネガティブになるという結果は得られなかったものの、このような緩やかな変化もまた、学校への満足感や価値観が低下する (Berkovitz, 1997; Blanc, Boulerice, & Tremblay, 2000; Eccles, Midgley, Wigfield, Buchanan, Reuman, Flanagan & Iver, 1993; Finn, 1989; Hirsch & Rapkin, 1987; Marsh, 1989; Ryan, 2001) 時期におこる一つの現れであるかもしれない。本間 (2000) は、休まずに学校に通っている子どもも必ずしも学校に対してポジティブな感情を抱いているとは言えないとも論じている。

また、社会的に問題があるとみなされる行動や事態に対して許容する傾向が高まった。さらに、それはテレビに対する意識にも反映され、暴力シーンを見ても特に何も感じない者が増えたり、笑いや正義のための暴力シーンを認める傾向が高まった。抑うつ傾向が高まったり (Berkovitz, 1997)、不登校、退学、煙草、アルコール、ドラッグ、10代の妊娠、非行などの事件や問題行動が増加することが示されている (Bailey, 2000; Pnton, 1997; Weissberg & Greenberg, 1998) が、本研究では、このような顕著な問題性を捉えるまでには至らなかったが、平均的な中学2年生は、小学5年生よりも問題性が高いことは、本研究でも支持されたといえよう。

このような時期に、子どもたちのテレビメディアとのかかわりかたにも変化がみられた。テレビ視聴時間は2〜3時間と、小学5年生から中学2年生で変化はみられなかったものの、子ども部屋でのテレビ所有率が高まったり、保護者が子どものテレビ視聴に働きかけることが少なくなるなど、子ども自身の主体性をもったテレビ視聴がなされるようになることが示された。中学生になると、自分で意志決定をすることが可能になると同時に、そうしたいという欲求も増加する (Eccles & Midgley, 1989; Eccles et al., 1993, 1998; Wigfield et al., 1991) が、それがテレビ視聴という生活の一側面においても反映されていることが推測される。

それに伴い、視聴番組の種類がアニメからドラマや歌番組へと変化した。テレビが友だちとの共通の話題を提供する働きを持つことから、中学生にとって、

友だちと共通の番組を見ることが仲間関係維持の上でも重要になるのだろう。思春期は、友だちと過ごす時間が増加し、それが親と過ごす時間よりも多くなる時期 (Larson, 2000) であり、また、大人の規範よりも仲間集団での規範が優先されるようになり、規範意識の共有がみられ始める (Collins & Laursen, 2000)。自己開示や気持ちの理解、共通の趣味といった、内面の共通性を求める友だち関係へと変化するとともに、他者の視点をとることができるようになり、自分がどう見られているかを気にするようになる (Collins & Laursen, 2000; Wigfield et al., 1996)。また、思春期における親からの自立は、孤立、孤独、混乱の感情を伴うが、そのサポートのために仲間をつくり社会を作ることを求めるようになる時期でもある (Sullivan, 1953)。この時期に、友だちと共通のテレビの話題をもつことは、自分自身の安心感、友だちとの仲間意識を高める上で、重要なことなのだろう。ただし、この時期は、子どもたちが直面する大きな課題に対して準備されていないために、危機的状況にさらされる可能性もある (Blos, 1962)。今日の子どもは、発達加速化現象により、身体的成熟と精神的成熟が非常にアンバランスで、精神的に十分成熟していない年齢で思春期の変化を経験しなくてはならないという現状もあり (笠井, 2000; 保坂, 2000; 齋藤, 2000)、未成熟な者同士との共通の仲間意識を求めるあまりにリスクを伴う可能性も否定できないだろう。

まとめと今後の課題

本研究では、小学5年生が中学2年生になるまでを追跡した調査をもとに、思春期における心理的变化と、思春期の変化が反映される子どものテレビメディアとのかかわりの変化を捉えた。テレビとのかかわりという生活の一部をみても、思春期の子どもの自律性の高まり、また、思春期の子どもにとっての友だち関係の重要性が伺える。

今後は、子どもの発達に対してテレビメディアがどのような影響を及ぼすのかを検討したい。

文献

- Alsaker, F. D., & Olweus, D. (1992). Stability of global self-evaluations in early adolescence: A cohort longitudinal study. *Journal of Research on Adolescence*, 2, 123-145.
- Bailey, S. (2000). Serious antisocial behaviour. In P. Aggleton, J. Hurry, & I. Warwick. (Eds.), *Young People and Mental Health*. (pp.91-110). New York: Willey.
- Bandura, A., Pastorelli, C., Barbaranelli, C., & Caprara, G. V. (1999). Self-efficacy pathways to childhood depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 76, 258-269.
- Berndt, T. J., & Burgoyne, L. (1996). Social self-concept. In B. A. Bracken (Ed.), *Handbook of self-concept: Developmental, social, and clinical considerations*. (pp.171-209). New York: Wiley.
- Berkovitz, I. H. (1997). Junior high/middle school and high school life. In Flaherty, L. T., & Sarles, R. M. (Eds). *Handbook of Child and Adolescent Psychiatry*. Vol.3. (pp.233-242). New York: Wiley.
- ブロスP. (著). 野沢栄司(訳). (1971). 青年期の精神医学. 東京: 誠信書房.
(Blos, P. (1962). *On Adolescence*. Free Press.)
- Cairns, R. B., Cairns, B. D., & Neckerman, H. J. (1989). Early school dropout: Configurations and determinants. *Child Development*, 60, 1437-1452.
- Cantor, J. (2000). Media violence. *Journal of Adolescent Health*, 27 (Suppl.), 30-34.
- Collins, W. A., & Laurson, B. (2000). Adolescent Relationships: The Art of fuge. In C. Hendrick & S. S. Hendrick (Eds.), *Close relationships: A sourcebook* (pp.59-70). CA: Sage.
- Connor, D. F. (2002). Risk and Protective Factors in Aggression and Related Behaviors. In D. F. Connor. (Ed.), *Aggression and Antisocial Behavior in Children and Adolescents. -Research and Treatment-*. (pp.113-162). The Guilford Press: New York.
- Eccles, J. S. & Midgley, C. (1989). Stage-environment fit: Developmentally appropriate classrooms for young adolescents. In C. Ames & R. Ames (Eds.), *Research on motivation in education*. (Vol. 3, pp.139-186). San Diego: Academic Press.
- Eccles, J. S., Midgley, C., Wigfield, A., Buchanan, C. M., Reuman, D., Flanagan, C., & Iver, D. M. (1993). Development during adolescence: The impact of stage-environment fit on young adolescents' experience in schools and in families. *American Psychologist*, 48, 90-101.
- Fouts, G., & Vaughan, K. (2002). Locus of control, television, viewing, and eating disorder symptomatology in young females.
- Fulgini, A. J., Eccles, J. S., Barber, B. L., & Clements, P. (2001). Early adolescent peer orientation and adjustment during high school. *Developmental Psychology*, 37, 28-36.
- Gentile, D. A., & Walsh, D. A. (2002). A normative study of family media habits. *Applied Developmental Psychology*, 23, 157-178.
- Hirsch, B. J., & Rapkin, B. D. (1987). The transition to junior high school: A longitudinal study of self-esteem, psychological symptomatology, school life, and social support. *Child Development*, 58, 1235-1243.
- 本間友巳. (2000). 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析. *教育心理学研究*, 48, 32-41.
- 保坂享. (2000). 学校を欠席する子どもたち. 東京: 東京大学出版会.
- Huston, A. C., Donnerstein, E., Fairchild, H., Feshbach, N. D., Katz, P. A., Murray, J. P., Rubinstein, E. A., Wilcox, B. L., & Zuckerman, D. (1992). Big world, small screen: The role of television in American society. Lincoln: University of Nebraska Press.
- 笠井孝久. (2000). 中学生という時期. 村瀬嘉代子・三浦香苗・近藤邦夫・西林克彦 (編) 青年期の課題と支援(pp.2-7.) 東京: 新曜社.
- 警察庁. (2001). 警察白書—21世紀を担う少年のために—. 警察庁.
- Larson, R. W. (2000). Toward a Psychology of Positive Youth Development. *American Psychologist*. 55, 170-183.
- Marsh, H. W. (1989). Age and sex effects in multiple dimensions of self-concept: Preadolescence to

- early adulthood. *Journal of Educational Psychology*, 81, 417-430.
- Marsh, H. W., & Hattie, J. (1996). Theoretical perspectives on the structure of self-concept. In B. A. Bracken (Ed). *Handbook of self-concept: Developmental, social, and clinical considerations*. (pp.38-90). New York: Wiley.
- 無藤隆・川浦康至・角谷詩織. (2001). 青少年へのテレビメディアの影響調査第1回調査報告書. 放送と青少年に関する委員会.
- 無藤隆・角谷詩織. (2001). 青少年へのテレビメディアの影響調査について—子どもの置かれている環境の中での検討が必要—. *新・調査情報*, No.31, 4-7.
- 恩賜財団母子愛育会・日本子ども家庭総合研究所 編. (2002). 日本子ども資料年鑑. KTC中央出版.
- Ponton, L. E. (1997). Risk-taking behaviors in adolescence. In Flaherty, L. T., & Sarles, R. M. (Eds). *Handbook of Child and Adolescent Psychiatry*. Vol.3. (pp.87-96). New York: Wiley.
- Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. (Vol.3, pp.107-136). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Roeser, R. W., Eccles, J. S., & Sameroff, A. J. (2000). School as a context of early adolescents' academic and social-emotional development: A summary of research findings. *The Elementary School Journal*, 100, 443-471.
- Ryan, A. M. (2001). The peer group as a context for the development of young adolescent motivation and adjustment. *Child Development*, 72, 1135-1150.
- 齋藤憲司. (2000). 青年期の発達の特徴. 村瀬嘉代子・三浦香苗・近藤邦夫・西林克彦 (編) 青年期の課題と支援 (pp.14-21.) 東京:新曜社.
- 佐藤逸子・杉原一昭・藤生英行. (2000). 女子中学生の自尊感情と自己評価意識についての短期縦断的研究. *カウンセリング研究*, 33, 57-68.
- Singer, M. L., Slovic, K., Frierson, T., & York, P. (1998). Viewing preferences symptoms of psychological trauma, and violent behaviors among children who watch television. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 37, 1041-1048.
- 塩見邦雄. (1994). 中学・高校生の心理と指導. 塩見邦雄・吉野要(編). 中学・高校生の心理と指導. 京都:ナカニシヤ出版. (pp.7-16.)
- 総務省. (2002). 第51回日本統計年鑑. 総務省.
- サリヴァン H. S. (著). 中井久夫・山口 隆(訳). (1976). 現代精神医学の概念. 東京:みすず書房. (Sullivan, H. S. (1953). *Conceptions of Modern Psychology*. New York: W. W. Norton.)
- 角谷詩織・無藤隆. (2002). 第二回青少年へのテレビメディアの影響調査について—テレビとのかかわりにもみられる発達の・環境的变化—. *新・調査情報*, No.37, 2-7.
- Underwood, M. K. (2002). Sticks and stones and social exclusion: Aggression among girls and boys. In P. K. Smith & C. H. Hart (Eds.), *Blackwell Handbook of Childhood Social Development*. (pp.532-548). Oxford: Blackwell.
- Weissberg, R. P., & Greenberg, M. T. (1998). School and community competence-enhancement and prevention programs. Damon, W. (Ed.) *Handbook of child psychology*. Chap.13 877-954. New York: Wiley
- Wigfield, A., Eccles, J. S., & Pintrich, P. R. (1996). Development between the ages of 11 and 25. In D. Berliner, & R. Calfee (Eds.), *Handbook of educational psychology* (pp.148-185). New York: Macmillan.
- Wigfield, A., Eccles, J. S., Iver, D. M., Reuman, D. A., & Midgley, C. (1991). Transitions during early adolescence: Changes in children's domain-specific self perceptions and general self-esteem across the transition to junior high school. *Developmental Psychology*, 27, 552-565.
- 吉野 要. (1994). 成熟と発達課題. 塩見邦雄・吉野要(編). 中学・高校生の心理と指導. 京都:ナカニシヤ出版. (pp.17-36.)